

た、いろ／＼なものが御前の傍に来てくれるよ。」

「いやはや、も一つのより猶といけねい。」と読み終つた銀田は唸いた。「實際何も書いてねいや。どうだ。あんな場合に筆をとるとしたら、何か意味のある事を書きさうなものぢやないか。何がつかまへどころのある、此子供は何者だ位の事をよ。」

何とも返事のしやうもなかつたので、一同は唯もつともだそばかりに點頭うなづいて不承／＼に同意した。

が、それが何の足しにも實はならなかつたのである。(四の終)

#### 海邊にて

坊やが海邊に寝ころんでゐた時に、

家の人達が坊やに

木で出来た鋤を下さつた。

「濱邊の砂をほつてお遊び」と。

坊やのこしらへた澤山の穴が

コップのやうで空虛からつばでした。

その穴の一つ一つに海の水が這入つて来て、

とう／＼、はいれきれないほど一杯になりました。

スチープンソン

#### 夏やすみ

めつきり暑くなりました。いよ／＼暑中休眠になります。これからしばらくは、子供達も、朝から晩まで、母様の膝もとにくらすことになりませう。幼稚園に行つて居れば、定めのおやつだけで我慢の出来る子供も、つひ手短にお菓子や、果物や、アイスクリームや、食べるもの飲むものが目につけば、そして、また、暑い／＼でゴロ／＼してゐれば、おれだりも出ませう。食へ過ぎぬよう、飲み過ぎぬようと、この暑いさかりには、母様方の苦勞もなか／＼でせう。ことに蚊帳の中の廻轉運動のげげしさには、薄い寝びえいらす位では、なか／＼安心も出来ませう。ことに疫痢といふ恐しい病魔は、とりわけ、五つ六つ位の幼児を好むときいておりますから、注意の上にも注意が大切でせう。

けれども、子供はやはり元氣なものです。眼もくらむやうな炎天にも、汗みづくになつて、印度人のやうに焼けて、蟬取りに、蜻蛉つりに餘念のない腕白盛りを見ますと、暑い／＼を口癖に團扇をはなすことも出来ないで、喘いでゐる大人の方が背をぬがればなりません。よく遊んで、よく眠つて、この一箇月たらずの休みの間に、背も伸び、肉もつき、顔色も染まつて、元氣にみちた子供達を、幼稚園に送りだし、これをむかへる先生方も、お友達も、た意氣あたるべからざるものでありたいものです。發育さかりの幼児達には、心も、からだも、この一箇月が實に貴い時となりませう。